

コロナ薬 28日日本格供給

塩野義 副作用など調査、公開

塩野義製薬が開発した新型コロナウイルス感染症の治療薬「ゾコーバ」が28日から医療機関に本格的に供給される」となった。塩野義は供給開始から6ヶ月間、服用した金員から副作用の有無など安全性のデータを集め、公開する。

ゾコーバは、軽症者として22日に厚生労働省が緊急承認した。12歳以上の軽症や中等症患者に使用、1日1回、5日間服用する。塩野義は既に100万人分のゾコーバを国に販売した。加藤勝信厚労相は25日、当初は12月初旬を予定していた医療機関への本格的な供給を11月28日に前倒

しする意向を表明した。

供給開始から6ヶ月間は、ゾコーバを処方した医療機関を同社の担当者が訪ね、処方された患者の副作用の有無を確認するなど、追跡調査を行う。結果は2週間にごとに同社のホームページなどで情報を開示す

る。疲労感や味覚障害といつた新型コロナの後遺症についても情報を集め、ゾコーバが後遺症の治療や予防に使えるか研究を重ねる。

同社は来年3月末までに約300万人分を生産し、その後は年間1千万人分を生産できる体制を整える。

研究開発費 重い負担

「感染症は本当にビジネスになりにくい。大手製薬会社は撤退した上に、ベンチャーカンパニーが挑戦しても薬は売れず破綻してしまう」

24日に開いた説明会で塩野義製薬の手代木功社長はそう嘆いた。

感染症向けの医薬品の需要は流行に左右され、感染が終息すれば商機は消えます。塩野義は2022年度、ゾコーバの売上高を国による買い上げなどで1100億円と見込む。数年間は海外を含めた各國政府の買い求めがあると予想するが、その後は見通せない。

塩野義は、21年度に730億円、22年度に950億円と、2年連続で同社として過去最大の研究開発費を計上した。年間売上高が4千億円規模の同社にとって、決して軽くない負担

■塩野義製薬の新型コロナ向け飲み薬（ゾコーバ）とワクチンをめぐる主な動き

【2020年】

4月 ワクチンの開発を表明
12月 ワクチンの臨床試験（治験）を開始

【21年】

7月 ゾコーバの治験を開始
8月 ワクチンの成分の一部を変更して治験を再実施

【22年】

2月 ゾコーバを厚生労働省に承認申請。「条件付き早期承認制度」の適用を求める

5月 ゾコーバの承認申請を「緊急承認」に切り替え

11月 厚労省がゾコーバを緊急承認

ワクチンを厚労省に承認申請

だ。感染症が落ち着いた後も、工場の維持費などコストはかかる。厚労省による緊急承認は、いわば「仮免許」で、承認期限は1年。塩野義は今後も有効性と安全性のデータを集める必要がある。再審議で有効性を「確認」できなければ承認を取り消される。そうなれば、経営へのダメージは必至だ。

手代木社長は「コロナを機に、感染症の研究開発を持续させる方法を考えほしい」と危機感を示した。

(田中義子)